

新万葉物語

伊藤左千夫

青空文庫

からからに乾いて巻き縮れた、櫟けやきの落葉や榎えのきの落葉や杉の枯葉も交った、ごみくたの類が、家のめぐり庭の隅々の、ここにもかしこにも一団たむろずつ屯をなしている。

まともに風の吹払った庭の右手には、砂目の紋様もようが面白く、塵一つなくきれいだ。つい今しがたまで背戸山の森は木こがらし枯に鳴っていたのである。はげしく吹廻した風の跡が、物の形にありありと残っているだけ、今の静かなさまがいつそう静かに思いなされる。

膚はだえを切るように風が寒く、それに埃の立ちようもひどかったから、どこの家でもみな雨戸を細目にして籠こもっていた。籠りに馴れ

た人達は、風のやんだにも心づかないものか、まだ夕日は庭の片隅にさしてるのに、戸もあけずにいる。

軒に立掛けた、丸太や小枯竹が倒れてる。干葉ひばの縄が切れて干葉が散らばってる。蓆むしろ切れが飛び散っている。そんな光景の中に、萱葺屋根かやぶきには、ところどころに何か立枯れの草が立ってる。細目な雨戸の間から、反古張ほごばりの障子がわずかに見えてる。真黒に煤すすけた軒から、薄い薄いささやかな煙が、見えるか見えないかに流れ出ている。

鉄砲口の 拾半纏あわせばんてんに 唐縮緬とうちりめんのおこそ頭巾を冠った少女が、庭の塵つ葉を下駄に蹴け分わけて這入って来た。それはこの家の娘お

小夜^{さよ}であつた。

「おばあさん、あんのこつたかい、風も凪^なげてこのえい日になつたのんを戸をあけないで」

こう云つてお小夜は、庭場の雨戸を二三枚がらとあける。そこへまた顔にも手にも、墨くろぐろの国吉も走り込んできた。

「姉^{たす}さん田雀^{たすめ}々々、二匹々々」

国吉は手に握つた二つの田雀を姉の眼先へ出して見せる。

「誰れかに貰つてきたのかい」

「あんがそうだもんでん、ぶつちめて捕^とつたんだい」

「ほんとうに」

「ほんとうさまだ」

「ううんお前に捕られる田雀もいるのかねい」

「姉さんこりりで五つになった。机の引出しさ三つ取ってあらあ、こりりで五つだ姉さん、お母さんに拵こしらえてやるとえいや」

どれと姉が手にとるが否や、国吉は再び背戸の方へ飛び出してしまった。

「おばあさん、蒲団から煙が出てるよ」

お小夜は頭巾を脱ぎながら座敷へ上った。お祖母さんは、炬燵こたつの蒲団を跳はねて、けぶりかかった炭を一つ摘まみ出す。

「お前早かったない、寒かったつпей、炬燵こたつで一あたりあたれま」

「ああにお祖母さん、帰りにやね風が凪げたかつね、寒いどこでなかつたえ」

「ほんに風が凪げたない。お母も寝入ってるよ。あれではあ、え
 いだっぺいよ」

「そらあ、えかった。そりじやお祖母さん葉は、後にしようかね
 い」

お小夜はちよつと納戸なんどに母を窺うかがったが、その睡ってるに安心し
 たふうでしばらく炬燵に倚りかかった。頭巾を脱ぐ拍子に巻髪が
 崩れた。ゆらぐばかりの髪の毛が両肩にかかっている。少し汗ばん
 でほてりを持ったお小夜の顔には、この煤すすけた家に不ふ似にあ合いなよう
 な、活いき活いきとした光をつつんでいる。祖母もつくづくと孫の横
 顔を見て、この娘は、きつと仕合せがえいだろうと考えた。

炬燵に掛けた蒲団には、ずいぶん垢もついている。継つぎも幾箇所と

なくかかつてる。畳は十年前に裏返しをしたというままのものである。天井は形ばかりに張つてはあるが、継目の判らぬくらい煤が黒い。仏壇とて何一つ装飾はない。燈盞、香炉、花入いずれも間に合うばかりの物である。そこらに脱いである衣服の類にも、唐縮緬以上の物は一つもない。台所はと見ると、たて切つた雨戸の隙すきから、強い夕日の光が漏れ込んでただガランとしている。苦労に苦労を重ねて、疲れ切つたような祖母の顔、垢あかづいた白髪頭に穴のあいた手拭を巻きつけている。この微塵みじんこつばい骨灰の中に珊瑚の玉かなんかが落ちてるように、お小夜は光つてる。去年の秋小学高等科を優等で卒業してから、村中の者が、その娘を叱ことばる詞には、必ず上かみの家のお小夜さんを見ろというように評判がよいの

である。

お小夜の母は十年以来多病で耕作の役には立たない。父なる人の腕一つで家族は養われて来た。今日も父は馬を曳いて浜へ日に二度目の荷上げに行つた。どうせ夜でなけりや歸らない。

病人が眼を覚したら、この薬を飲ませてくれと、お小夜は懐ふところにあつた薬を祖母に渡して立つた。そこに落ちてた金かなぎん巾の切れを拾つて、お小夜は手にあまる黒髪を頸くびのあたりに結わえた。そうして半纏はんでんを脱ぎ襷たすきを掛けながら土間へ降りた。祖母はお小夜の、かいがいしく頼もしい、なりふりを見て、わが身にもこの家にも、望みが立ちかけたような思いがした。

今までかじけにかじけて、炬燵にしがみついていた祖母もにわ

かに起つて、庭のあたりを見廻り、落ちた物を拾つたり、落葉など搔き寄せたりする。国吉もいつのまにか歸つて来た。

「お祖母さんおれもやつてやる」と叫んで搔き散らしてる。

お小夜は飯汁の外に麦をえます、その跡で馬の物を煮る、馬の裾湯すそゆを沸かす。小さな家にも馬が一つあれば日暮の仕事はすこぶる忙しいのだが、お小夜はその駈け廻るように忙しい中でも、隣家園部の家の物音にしばしば耳を立てるのである。

今日は客でもあつたものと見え、時ならず倉の戸の開閉あけたてが強い。重い大戸のあけたては、冴えた夜空に鳴り響く。車井戸くさりの鎖の音や物を投出す音が、ぐわんぐわんと空気に響くのである。物々しき大家の鳴音が、ひしひしとお小夜の胸には応える。

「あんなことをいったってちよつとした出来心だか何んだか知れやしない」こう考えてお汁の実に里芋をこしらえてる。とんとんと芋を切つてはまた考える。

「大学校を卒業したつて、そんな立派な人が、どうして私なんかにあんなことをいうんだらう」

お小夜は手もとが暗くなつたのに、洋燈ランプをつける気もなく手さぐりで芋を切つてる。

「姉さん田雀をどうしたかえ」

国吉が洋燈ランプを持ってきてそういった。

「あれ、忘れただよ、国、にしがには毛をむしれねえかい」

「あ、毛をむしるだけならおれにもできら」

お小夜はお汁鍋を囲炉裡へかけ、火を移した。祖母と国吉は、火のはたで田雀の毛をむしっている。お小夜は明日の朝の米を研ぎに井戸端へ出た。井戸端へ立てば園部の家の奉公人などが騒ぐ声も聞える。お小夜は釣瓶棹つるべさおを手に持ったまま、また、三郎のことを考える。澄み切った空から十三夜の月が霜のような光を井戸端へ落している。木立の隙すきから園部の家の屋根瓦がちらちら光って見える。

「三郎さんは厭いやな人どころではないけれど、あんな立派な家の人だから、旦那様やお母さんはあんなむずかしそうな人だから、何だか気味が悪い」お小夜は胸の動悸どうきをはずませて考え込む、米を研ぐ手も上うわの空に動かしてる。

「私といっしよに耕作するって、ほんとに三郎さんはそんな気か
しら、三郎さんがほんとにそんな気ならばいくら嬉しいか知れぬ
けれど……大学校を卒業した、園部の三男様が、私といっしよに
耕作するって、あんだかほんとにできぬい。どうしたもんかなあ
……」お小夜は研ぎ終った米に、いま一ひとつ釣瓶つるべの水を注いで、そ
れなり立って考えてる。考えは先から先へ果はてしがないのである。

「姉さん……姉さん、田雀を拵こさえてくつだい、姉さんてば」

お小夜は国吉に呼立てられ、はつとして病母のことに思いかえ
った。それから手早に雀を拵え、小皿に盛るほどもない小鳥を煮
て、すべての夕食ゆうげを調とえた。病母も火の端はたへ連れ出して四人が心
持よく食事をした。

祖母も病母も小鳥がうまいうまいと悦んだので、国吉はおれがおれがと得意にぶつちめの話をする。こうしたところを見れば、誰の顔にも不満足な色はない。「この分ならば明日は起きていられるだろう」という、病母の話声にも力があつた。

お小夜は父が今にも帰るだろうと思うから、炬燵の側へ祖母と国吉の寢床を敷いてやり、病母には猫火鉢へ火を入れて、いつでも寝られるようにしてやる。痒いところへ手の届くようなお小夜の働きぶりを病母も心から嬉しいのだ。

お小夜の母も、つい去年までは病軀を支えて二人の子供を介錯やくした。夫が駄賃だちんに行つて晩おそく帰つてくる。二人の子供を寝せ伏せ年寄をいたわりながら、夫の馬始末まで手伝つてやる、その

永年の苦勞は容易でなかつた。

それが今では見る通りのありさまで、国吉ももはや手はかからず、お小夜は家の事何もかも身に搔取かいとつて病母に少しも苦勞などさせない。お小夜が起つてかかれば、何でも見てる間に片付まいてしまうように思われる。この頃は病母もその病身を一向苦にせぬようになつた。

腕白盛りの国吉が、雀を捕り溜めてみんなに食わせたということも病身の親の身には埒らちもなく嬉しかった。お小夜が台所を片付けてしまう間、祖母と病母とは、話に力を入れて、

「まことに神様というは、有難いものですねい。いつまでも人を困らせて置かないから……」

こういつて二人は、つくづく心の中で神様に感謝するらしく涙を拭いた。

どつどつと馬の足音がすると思うと、ふツふツと強い馬の鼻息が聞え、やがて舌した金をがねを噛む音が聞えて、馬は庭まで這入ったけはい。お小夜はすぐ庭へ出て父の荷卸にしに手伝つてやる。月が冴えて昼間のように明るい。

「こんなに晩おそくなつてお父さん寒かつたべい」

「ああに寒かあなかつた。鰯いわし網あみが出たからね。それを待つて

てこんなにおそくなつた。そらその菰こもに三升ばかり背黒鰯せぐろいわしがあらあ。みんなは、はあ飯めしくつちやつぺいなあ」

「ああ、たべつちやつた。お父さんにだけ少し拵こぎえてあげますべ

い

話す間もお小夜は油断なく手早に事を運ぶ。馬うまだらい 盥らいを庭の隅

へ出して湯を汲めば父は締しめかす 糟すを庭場へ入れ、荷鞍にぐらを片づけ、薄着すそゆになつて馬の裾湯すそゆにかかった。

いかにも寒々とした月夜の庭に、馬は静かに立っている。人は両肌脱いで美しい口拍子を取つて馬を洗う。湯気は馬の背以上にも立つて、人も馬も湯気にぼかされてほとんどそのまま昼のようだ。園部の家では夜番の拍子木が二度目を廻っている。

お小夜は食事あたたかく父に満足させて後、病母の臥床ふしどをも見舞い、それから再び庭場におりて米を搗つき始めた。父は驚いて、

「もうずいぶん晩いだろう……今から搗かないだつてどうにかな

んねいかい。明日の朝の分だけあるなら明日のことにしたらどうだい」

「あアにぞうさねいよお父さん、今夜一ひとつす白搗ひとうすいて置かねけりや、明日の仕事の都合が大へん悪いからね。お父さんはくたぶれたでしよう、かまわないで寝て下さい」

お小夜は父にかまわず、とうんときねと杵きねの音寂しく搗きねいてる。「そつだらおまえ黒くともえいから、えい加減なんどに搗きねいて寝ろや。

「おら先に寝るから」といって疲れた父は納戸なんどへ這入るが否いびきやすぐいびき鼾いびきを漏らすのであった。

園部の家でなおときどき戸を開あけたて閉たてする音がするばかり、世間一体は非常に静かになった。静かというよりは空気が重く沈んで、

すべての物を閉塞とぎしてしまつたように深更しんこうの感じが強い。お小夜はまた例の三郎のことに屈托くつたくしてか、とぎれとぎれにとうん……とうんと杵おろを卸おろしてる。力の弱い音に夜更よふけの米搗、寂しさに馴れてる耳にも哀れに悲しい。お小夜はわれとわが杵の音に悲しく涙を拭いた。

病母の咳せく声こゑがする、父の鼾いびきがつまりそうにしてまた大きく鳴る、国吉が寝言をいう、鼠ねずみが畳の上を駈かけ廻る。お小夜はそんな物音が一々耳にとまる。お小夜は三郎のことが少しも胸を離れないけれど、考えはどうしてもまとまらない。無理にも米を搗うてしまおうと思つても杵きね数かずは上らない。

「これではいつまで搗ういたつて搗うけやしない」と自分でそう思つ

てむしやくしやする。

「駄賃取りの娘、大学校を卒業した人、三郎さんは大家たいけの可愛が
り子息むすこ、自分は小作人の娘」お小夜はただ簡単にそんな事を口の
内で繰り返す。そうして埒らちもなく悲しくなつて涙が出る。

お小夜は米も搗けそうもないので、止めて寝ようかとも思うが、
またこうして一人で米を搗いてれば、三郎が来やしないかとも思
われて止めたくもないのだ。お小夜はついに今夜も三郎がきつと
来るように思われて来て、少し元気づいて米を搗きだした。

*

*

*

等と伊い
 能の禰ね
 乃の都つ
 和わ気け
 久く波ば
 胡ご可か
 我が加が
 等と流る
 里り安あ
 氏て我が
 奈な手て
 気げ乎を
 可か許こ
 武ん余よ
 比い
 毛も
 加か

青空文庫情報

底本：「伊藤左千夫集」房総文芸選集、あさひふれんど千葉

1990（平成2）年8月10日初版第1刷発行

初出：「文章世界 第四卷第二號」

1909（明治42）年2月1日発行

※誤植を疑った箇所を、初出の表記にそって、あらためました。

入力：高瀬竜一

校正：きりんの手紙

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新万葉物語

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>